五高五十年史

例言

一、本書は、第五高等學校開校五十年記念會の一事業として編纂したもので、書名は、十時會長の意見に從つた。而して題簽・題字・序文は、本校の歴史に最も關係深い方々に懇囑した。尙、去年の秋、嘉納先生にも面接して、題字揮毫の快諾を得たのに、不幸幽明界を異にするに至つたのは、洵に敬悼の情に堪へない次第である。

一、本書の編纂に就いては、庶務・敎務・生徒・會計・圖書・體操各課保管の書類、龍南會雜誌（今の龍南）各種の會誌等、直接關係あるものは勿論、官報・文部省沿革略・文部省年報・學制五十年史等の官記、國民敎育奬勵會編纂の敎育五十年史等の外、東京上野帝國圖書館・東京帝國大學敎育學研究室・熊本縣廳・熊本城阯保存會等に於て、關係資料を涉獵調査した。

一、第五高等(中)學校一覽に於て、誤脫と思はれるものは固より、苟も法規に關するものは、一應、官報又は法規類纂等に就いて之を補正した。これ卽ち本書と一覽とに、多少の相違を免れない所以である。

一、本書の引用文乃至記述等の出典は、その都度明記して置いたが、その必要を認めなかつたものは、時に煩を

避けたものもある。而して引用文中、誤解の虞れあるものは、マ、若くは原字を旁書して、なるべく原文を存したが、式辭・祝辭等の假名は片假名に、龍南會雜誌の引用文は、特殊の二三を除き、平假名に統一した。且、具申書・通知・掲示等の草案、往復電報の譯文等に於て、明かに誤脱と思はれるものには、或は假名の濁點を加へ、或は句讀を施して、繙讀理會に便ならしめたものもある。

一、皇室關係以外の人名には、氏を以て尊稱に代へ、悉く敬語を略したが、時には又、尊稱敬語共に省いた場合もある。統一を缺くの憾みはあるが、文勢の然らしむる所、敢て他意に出でたものではない。

一、外國人名、外國書目の類は、凡て原文に從つたため、稍均齊を失してゐるものもある。又、記述中の固有名詞・教科書目・學科課程等の間には、夫々・を附したが、前後の關係上、、を以てしたものもある。校正の際、それ等の遺漏を發見しても、行數の都合上、看過したものもある。

一、用語中、統一を缺いでゐるものも少くない。例へば、記念の記は、原文が紀になつてゐるものはそのまゝにし、周・週の字も同樣である。選擧の選・記憶の憶の如き、原文が夫々撰・臆になつてゐても、誤解の虞れのないものは、一々マ、を附しなかつた。そのを現す其、わがを現す我若くは吾等には、時には夫々の・がを加へ、時にはそれ等を省いた。世間に併用されてゐるからである。及・竝も、原文にないものはそのまゝにし、記述には、頭書字數の都合上省いたものの外、夫々び・にを附した。而して漢字は、歴史性と社會性とに鑑み、出來るだけ正文を採つて、誤用俗體を避けた。體（誤代体）・缺（誤代欠）・劍（俗劔）・亙（俗誤亘）・恆（俗誤恒）・査（誤査）・況（俗况）・決（俗决）・準（俗凖）・戲（俗戯）・畫（俗畵）等の如きそれである。但、到着の着・些少の些等は、社會性に徴して、誤字と知りながら、例外として之を使用した。若し夫れ句讀點の附し方は、現代の邦文に於て、最も亂雜を極めて居り、國定教科書に於てすら、疑ひを持つものであるが、本書に在りては、專ら筆の勢に任せたもので、必ずしも一家の私見に據つたわけではない。

一、資料の調査整理に於て、最も時日を要したものは、古城時代、任命順職員一覽表、各種の統計表等であつた。何れも正確を期したつもりではあるが、遺漏誤謬もあるであらう。故に若し他日それを發見した時は、他の諸項の內容と同じく、五高同窓會報の餘白を假りて、補正したいと考へる。而して右所錄の人名は、本校部を主體と爲し、且、雇の如きは、新校移轉までと、昭和十二年以外は、之を入れなかつた。それ等の人々に對しては、洵に相濟まぬ次第であるが、事情已むを得ないことである。且又、原籍竝に生年を加へたかつたが、不明の分も少くないので、悉く之を割愛した。是は、轉校事件・端艇事件・盟休事件等、龍南秘話とも稱すべきものを詳記することが、關係諸氏に對して禮儀を失し、故人に鞭つの思がするので、僅に一二行若くは數行を當てたこと、豫算の少額、物價の騰貴等のため、相當努力して蒐集摘記した凡てを輯錄し得なかつたこと、個人の編述でないため、結語に於て、意のまゝに論評を下し得なかつたこと、及び一身上の都合に因り、推敲洗錬、三たび稿を改めて、充分整備するの遑がなかつたことなどと共に、私の甚だ遺憾とする所である。

一、挿入の寫眞に就いては、曾て同窓會員諸氏に對し、書面又は會報を以て、貸與通知方を申出でたが、古い時代のものは、餘り手に入らなかつた。人物中、本校と直接關係ないものは、森・井上二文相であるが、高等學

校の歴史に於て、殊に本校の歴史に於て、その必要を感じたからである。而して前校長竝に秋月教授の肖像は、在職當時の風手を偲ぶ意味に於て、生徒圖書閲覽室に掲げてあるものを複寫した。それと同時に、歴代校長在職中の筆蹟をも網羅したかつたが、意の如くならなかつたのは殘念である。一般職員の肖像は、記事と關係もあり、閲覽室に掲げてもある杉山・平塚二教授のですら割愛したに拘らず、卒業生中、單身の惠利氏だけを入れたのは、「武夫原頭」が、恰も校歌の如く龍南人に親しまれてゐるからである。因みに作曲者は、各方面に照合して見たが、確證を得なかつたので、之を他日に殘すこととした。

一、本書編纂の旁、必要缺くべからざる本校一覽の缺本を補ふことに努めた結果、或は之を廢棄品中に見出し、或は個人の寄贈を受け、或は上野帝國圖書館より借用複寫して、全部を纏め得たことは、豫期せざる收穫であつた。

一、庶務課保管の卒業式（後の告別式・餞別式）、記念式等の式辭・祝辭、圖書館所藏の龍南會雜誌の合本は、唯一無二のものであるが、その凡てを本書に載錄することも不可能であり、之が複本の必要を認めたので、前者はその全文を寫し、後者はその全部の目次と內容の一部とを錄し、他日製本の上、同窓會に於て保存することとした。而して該鈔錄の如きは、好む所に偏し、求むる所に倚した嫌ひはあつても、無きに勝ると考へる。

一、昨秋は習學寮史、今春は熊本高等工業學校沿革史の刊行を見、今茲に本書が編述されたので、殘るものは、長崎醫科大學史及び龍南會史である。中に就いて龍南會は、來る昭和十六年十一月三日を以て、創立五十周年を迎へるので、本校の歴史を完成するためにも、龍南會五十年史の編纂を翹望して已まぬ。

一、本書の編纂は、去る昭和十一年正月を以て、私に一任されたのであるが、この種の刊行が、往々數人の手に成り、所謂寄木細工となる傾向があるので、假令管見に失する嫌ひはあつても、編纂の旨趣、記述の態度等を一貫せしむるため、本年三月十日、甫草を了るまで、敢て獨自の立場を堅持して來た。さりながら、自ら顧みて見聞の狹少と責任の重大とを覺えたので、負託の直後より、五高同窓會の十時會長は勿論、校內理事たる白壁傑次郎・八波則吉・山形元治・松尾精一・田中辰二・上田英夫・池田一幸・藤田繁一・菅野寅夫・竹原東一・小山直之・竹下直之の諸教授に援助批正を乞ひ、本校各課竝に同窓會事務の諸氏や、龍南會各部長諸氏を煩はしたことも少くない。殊に、古城の實地踏査や熊本城阯保存會等に屢次同行された池田教授、校正のため貴重なる時間を割かれた池田・竹原・小山・竹下の諸教授、昭和十一年七月より滿二年の間、筆耕に製表に精勵恪勤せる緒方正始君、寫眞・記錄等を寄贈又は貸與された諸氏、本校一覽その他の複寫を助成された熊本醫科大學教授尾崎正道氏、種々懇切なる助言を寄せられた初代熊本縣立熊本中學校長野田寛先生、印行に就いて特別の便宜を與へられた凸版印刷株式會社に對して、深甚の謝意を表する次第である。

昭和十三年戊寅十一月二十日

高森良人　誌